

飯野八幡宮の神饌 献饌神事の復元に関して

齋藤 ミチ子

はじめに

神饌の総合的研究プロジェクト計画の一端に多膳についての調査研究を加えている。神仏への献饌形態の中で、複数の膳を供薦する例は多く、その数も七十五膳（岡山県吉備津神社他）、三十膳（福岡市、鳥飼八幡宮）、二十二膳（福岡県、岩戸見神社他）などと多様であるため、整理分析に備えて、便宜上、「多膳」の語で括って作業を進めている。こうした過程で、飯野八幡宮（福島県いわき市）の八十八膳の献饌神事に関して、一九九八年に予備的な観察、記録を行ったので、以下与えられた紙幅内でその概要を報告したい。

一、神社の振興対策としての献饌神事の復元事業

飯野八幡宮では、神社本庁による第八期神社振興対策指定神社として、八十八膳献饌行事の整備企画が認められ、これにより同社の九月一日の古式大祭における八十八膳の献饌神事に取り組むことになった。三ヶ年を別途に、まず初年度は八十八膳献饌奉賛会の結成、神饌の素材である穀物（糯米）、野菜等を栽培する田畑の借用契約、古文書に則っての栽培品目の選定、調理法の検討がなされ、次年度は企画に沿って実践、最終の三年目は、軌道に乗った事業の定着と継続を図るといったのであった（第八期神社振興対策指定神社宮司研究会資料）。この事例は、神饌自体を注視する視点もさることながら、時代の推移による必然性によって、変容あるいは衰退した献饌神事の形態を、古文書に照らして、時代を超越して修正、復元するという試みであり、換言すれば、諸々の条件を異にし、価値観も著しく相違のある近世と現代との折り合いをどのようにつけるか、現代においてどのような意味をもち得るかとの、極めて今日的な問題を合わせ持つものである。

推進者側では、神饌の素材生産の過程に、いまやなおざりになった農耕儀礼の見直しをも盛り込み、とりわけ若年層への啓蒙的な機能を考慮し、御田植え祭、拔穂祭などには、保育園児や高校生有志に参加の機会をもっている。

二、飯野八幡宮と古式大祭

社伝によれば、飯野八幡宮は、文治二年（一一八六）、岩清水八幡宮を勧請したのに始まるといわれ、祭神は品陀別名、息長帯姫命、比売神の三柱を祀る。近世には神領四〇〇石の御朱印を与えられ、領主からの寄付田五十石もあったが、明治期に入って殆どを失い、さらに大戦後の農地解放により、神領地のすべてを失った。近世の同神社の配置図によると、社殿の周囲には諸々の建造物が整い、「一も備らざる無し」と言わしめる程のものであったらしい（磐城誌料 歳時民俗記）。そこには神仏習合のたまたまも顕著に見られ、そうした時代には、供僧が十二坊（後に十六坊）あって、明治以前は例祭にも供僧が関与していた。その名残は献饌形態の中にも窺知できる。

献饌神事復元の拠り所となった古文書は、往年の社家三十二人の一人であった家から飯野宮司家に、昭和六十年頃に提出されたもので、「文化六巳年 定式扣」と書ききした六十枚の和綴じのものであった（飯野盛男「古事録との出逢い」『月刊若木』第四二四号）。

整備復元が図られるまでは、時勢の状況が反映した献饌様態で、献饌用の祭器具も、あるだけの分を使用していた。後に漆が剥げたり、破損した沢山の容器が見い出されて、「飯野八幡宮流鎗馬の用具類及び献饌祭器」として、いわき市の有形民俗文化財に指定され、補助を得て、大椀、丸膳、盃台、高杯、御供器箱膳各三点、杯、皿、椀、器台など一九二点が、補修され塗りなおされて優美な祭器具に甦り、それがさらに献饌様態の再生を促したといっても良からう。【以下次号】

齋藤 ミチ子 國學院大學日本文化研究所

國學院大學日本文化研究所報 No. 206
平成十一年一月二十五日 より転載

献穀会年間行事

- 四月上旬 八十八膳献穀会 総会
- 五月中旬 田打祭
- 五月下旬 御田植祭
- 八月下旬 〆縄奉製勉強会
- 九月十五日 飯野八幡宮古式大祭 八十八膳献饌神事
- 十月上旬 拔穂祭
- 十月中旬 芋煮会
- 十月下旬 研修旅行
- 十二月下旬 そば打ち
- 十二月下旬 忘年会
- 一月上旬 農立て



拔穂祭のようす

撮影：野澤 功氏

宮司あいさし

この度の八十八膳献穀会会報「結」の発行を心よりお祝い申し上げます。同時に、献穀会の活動に深甚なる感謝の意を申し上げます。

飯野八幡宮の祭礼は例年九月十四・十五日に執り行われており、鎗流馬神事は有名であります。八十八膳献饌行事は一般の方々にはあまり知られておりません。

しかしながら、春に豊作を祈願し、秋のみのりには神前に海・山・川・野のお供え物を山のごとくお供えし、祝詞を奏上し、今後の安寧を祈願するという報恩感謝の心は、祭りの中核をなすものであります。

しかも、そのお供え物が八十八膳という大変多くのお料理が、献穀会会員及び神職の手により、押し寄せる波のごとく次々にご神前にお供えされる姿は、誠に尊いことであり、神々が感応された瞬間でもあること信じるところであります。



撮影：野澤 功氏

飯野八幡宮 宮司 飯野 光世

この八十八膳神饌物の復元に、献穀会の果たした役割は大きく、会のご支援がなければ到底考えられないことでありました。また、会報の名称は、神と人とを力強く結びつける、人と人とを結びつける、ということを念じて命名したものであります。

これからも、共に手を取り合って進んでまいりたいと存じます。